

銀行総務特命

漏洩

虫がいる。

この帝都銀行という巨大な組織の中に、一匹の虫がいる。そいつはくねくねと体をくねらせ、鋭い二本の牙で、静かに確実に、信用の牙城を蝕み続けている。

11 漏洩
きっかけは、一本の電話だった。相手は新宿区内の名簿業者で、広瀬とだけ名乗った。電話はいったん融資部に回され、〃こいつはやばい〃となった途端、——帝都銀行ではどこの部課でも同じことをするだろうが——総務部企画グループの特命担当へと取り次がれた。

「うちの名簿が流出しているらしいぞ」

まるで禁句を口にするかのような早口で告げられると、厄介事はいつものように指^{いぶ}宿^{すきしゅ}平^{うへい}のもとへ舞い込んできた。帝都銀行で唯一、不祥事担当の特命を受けている男の元へである。

「当行の名簿が回っているとお電話いただいたんですね」

指宿はきいた。

「昨日、うちに売り込みがあったんで、一応、お宅に教えておいたほうがいいかなと思つて。きつと外部に出たらまずいものだろうしき」

「ありがとうございます」

指宿は礼をいった。

「その売り込みは直接でしたか、それとも電話かなにかで？」

電話、と広瀬はいい、相手が「ミカド」と名乗ったといった。

「ミカド？」

帝都の帝、か。それとも、御門か。

「どんな字を書くかきかなかつたけどもさ。きつと偽名だな、ありや。年配の男の声だったよ」

電話の向こうは繁華街なのか少し騒がしい。広瀬の声は、五十過ぎの、調子のいい
商売人風の男を想像させた。タバコを銜くわえているのか、たまに声がかくぐもる。

「ミカドという男は——」

違和感を覚えながら、指宿はその名前を口にした。「名簿について何か説明しまし
たか。たとえばどこの支店の名簿だとか、名簿に掲載されている件数とか——」

「いや。ただ、数万件の顧客データだという話だった。中小企業中心って話だった
な」

指宿は息を吸い込んだ。

帝都銀行の取引先数は、約二十万社ある。その十分の一以上のデータが流出したと
いうのか。

「あの、広瀬さん」

指宿は、慎重にきいた。「その顧客データがどんな内容なのかおききになりませ
んでしたか」

「きいたというか、ファックスで送られてきたよ。サンプルがさ。どんな名簿なのか
見せてくれていったんだ。三ページだけだけどね」

「そのファックス、こちらへ送っていただいてもよろしいでしょうか」

「構わないよ」と広瀬はいい、間もなく総務部に五台あるうちの一台のファクシミリが鳴り始めた。

「まづいな」

一瞥するなり、指宿は、自分の中で警報がけたたましく鳴りわたったのを聞いた。

左側に顧客企業の名称、右に住所、代表者氏名と電話番号が並んでいる。それだけならまだまじだった。さらに、会社の売上げと経常利益、当期利益、総資産の額と払込資本の額まで掲載されている。

帝都銀行がもっている取引先の会社情報には様々なものがある。銀行の財産であり、信頼の証であり、歴史の重みそのものでもあるその情報は、決して外部には漏れないという大前提のもとに顧客から提供されたものだ。

そして、送られてきたデータを右端まで辿った指宿は、さらにあるものを見つけ、愕然とした。

「鈴木」

先程から電話でのやりとりを聞いていた鈴木和馬かずまを呼んだ。特命を拝する指宿の補佐を任じられている総務部企画グループの若手である。

指宿が指した箇所を見て、鐺木も目を瞠みはった。

5。7。4……。

それぞれの顧客データの右端に、そんな数字が記されている。一見、何ということのない数字の羅列られつに見える。だが、それが意味するところは――。

「信用等级ですか、調査役」

鐺木の顔が、怒りと焦りで、奇妙に歪んだ。

バブル崩壊後、都市銀行を始め邦銀が相次いで導入した融資先評価のための極秘ツール、それが信用等级付だ。

新聞や雑誌を賑わす、ムーディーズやS&Pといった格付け機関による「債券格付け」が主に投資家の尺度であるのに対し、銀行の「信用等级付」とは、まさに銀行が取引先企業に対して行う与信判断の尺度となるものである。

融資先の業績を様々な観点から分析し、「貸す」「貸さない」、もし「貸す」のであれば「どのくらいのレートで貸すのか」といったことが、この格付けの次第で決まる。評価基準は銀行によって異なるが、帝都銀行の場合、財務内容に応じて顧客を「1」から「10」までの十段階で評価していた。外部に漏れれば銀行の「取引先選

別」といわれかねない資料だけに、鐮木の顔色が変わるのも当然だった。

鐮木は、総務部内にあるオンライン端末へ走っていき、リストにある数社の財務データを出力して戻ってきた。

「当行の取引先に間違いありません。財務データの数字も信用格付けもそのままです」

鐮木は舌打ちと共に髪を掻き上げ、ほんのわずか、気性の激しさを露わにした。

「鐮木、システム部に電話だ」

静まり返った総務部の一角で指宿は冷静に指示を出した。

「融資管理系の情報ファイルへのログを確認。このサンプルにあるデータ全てにアクセスしたIDを割り出してくれ。高村くん——」

高村佳子を呼んで、広瀬が経営する会社名と住所を書きつけたメモを渡す。

「信用照会、頼む」

帝都銀行では、信用情報会社のコンピュータとオンラインで結んでおり、専用端末を叩けば、即座に当該企業の信用情報が出力できる仕組みになっている。

「わかりました」

佳子が足早に壁際の端末に走っていったのを見届け、新宿の広瀬の番号を回した。

広瀬は、事務所において指宿の連絡を待っていた。

「ミカドという男のことですが、広瀬さん以外にも売り込んだ相手のことを話していませんでしたか」

「さあ。そこまでは聞かなかつたが、あるかも知れないね。早い者勝ちとか言っていたな」

「値段など、売買条件は呈示されましたか」

「五百万円だとさ」

帝都の信用を叩き売ろうというのか。指宿がその思いを噛みしめたとき、佳子から広瀬の会社の信用情報が届けられた。

有限会社ヒロセ・サービス。資本金五百万円、売上高四千万円。ここ二期トントンの小さな業者だ。

「なんとお応えになつたんです」

それを見ながら、指宿はきいた。

「買えるもんかい、そんな高い名簿。だけど、それが本物なのかと疑問に思つてね。確かめてみたくなつたつてわけ」

それが電話をかけてきた理由のようだった。

「残念ながら、それについてはお応えしかねます」

聞かなくてもわかるさと、電話の向こうで広瀬は鼻を鳴らした。

「相手の連絡先を聞いていらつしやいませんか？」

「向こうから電話をするという話だったから」

なるほど。指宿は少し考えてからいった。

「もし、相手から電話がかかってきたら、一つお願いがあります」

「お願い？ いやだよ、面倒なことに巻き込まれるのは」

広瀬は警戒した。

「買う。そう返事をしていただけませんか」

相手は一瞬、押し黙った。

「いいけど……。金はどうするんだい」

「それについては、ご心配なく。当方で手配致しますから」

指宿はいった。

箇木がシステム部でコンピュータのログ記録を調べた結果、ひとつの事実が浮かび上がった。

先月一カ月に、融資部、支店部などを中心に約三十のIDが顧客の融資ファイルにアクセスしているが、その中で、当該操作をした心当たりの無い者がひとり出てきたという。

「支店部の中尾調査役ですが、担当外の支店ファイルにはアクセスした覚えはないということでした」

「カード・キーの保管状態はどうだった」

帝都銀行のオンライン端末を操作するためには行員一人ずつに配付されたID付き専用カード・キーが必要だ。その利用状況はホストコンピュータに記録され、誰がどんなファイルにアクセスしたか、知ることができる。

「手元にあります」

鍋木はいい、意味ありげにつけ加えた。「ただ、暗証番号は生年月日だそうですね。それに、先週、一時的にカード・キーが見当たらなかったことがあったと」

「届け出は」

鍋木は首を横に振った。

「どこかにしまい忘れただけだと思ったので、特に紛失届は出さなかったそうです。実際、数日したら、机の下に落ちてるのを見つけたということでした。何者かに利用されたとしたら、そのときではないでしょうか」

カード・キーを無くせば始末書ものである。それがわかっているから、ペナルティを怖れるあまり届け出が遅れ、セキュリティに支障を来す。考えられないことではなかった。

「全店レベルのファイルにアクセスしたIDのうち、十数名が数万件分のデータをダウンロードしています。多くは統計目的だと思われませんが――」

鍋木はダウンロードしたIDを持つ行員のリストを指宿に見せた。融資部に八人。支店部に四人。企画部に二人。中尾のIDもこれに含まれている。

一方、広瀬から入手した漏洩ろうえいデータのサンプルに記載されている顧客は、池袋と大塚、それに中野支店など数カ店にわたることがわかっていった。それぞれの支店単位で

も調査したが、他店の融資ファイル、しかも数カ店にわたる融資ファイルにアクセスした行員はいないことがすでに判明していた。つまり、情報漏洩の犯人は、支店ではなく、本部にしていることになる。

「一応、ダウンロードしたデータの所在も確認しましたが、光ディスクやハードディスク内に保管されたままになっていました。ただ、それを第三者が利用しようと思えば、出来たと思います」

指宿は細い息を吐いた。となると、犯人を特定することは難しい。

「それにしても、五百万円だなんて、バカにしますね」

楠木の言葉に、また指宿は別のことも考えた。

金が目的じゃないかも知れない――。

顧客データを漏洩させれば、銀行員としての将来どころか、刑事告訴、巨額の損害賠償の可能性すらある。それだけのことをするのに、五百万円というその金額が見合うとは思えなかった。あるいは、値段は五百万円でも、それを複数の業者に売りつけると踏んでいるのか。

いや、そんなに甘いはずはない。

帝都の顧客名簿が流出すれば、誰でも事件性を疑う。買い手にとって、五百万円は

決して安い買い物ではないはずだ。

本当に、犯人は当行行員だろうか？ 指宿は疑問を抱いた。もし、行員だとすれば、果たして、そいつの動機は――。

「銀行に対する恨みつてことはないでしょうか」

あり得ない話ではない、と指宿は思った。世間ではエリートと言われる銀行員だが、組織に不満を持つ者は決して少なくない。人事や人間関係の悩みや恨みは、どんな職場にもある。「虫」はどこにでもいるのだ。

「その広瀬っていう業者の連絡を待つしかないんですかね。その間に、マスコミに察知されなきやいいんですが」

鍋木の言う通りだった。信用は金と同じである。積み上げるには長年の時間を要するが、失うときには、わずか一瞬だ。

ところが、その日の夕方になって、情報漏洩に関する新たな一報が思わぬところから飛び込んできたのである。

「指宿くんか。実はちょっと困ったことになってね」

電話の相手は五反田支店の副支店長を務める神楽好久かぐらよしひさだった。指宿より入行年次は

二年早い、かつて企画部時代に一緒だったことのある男である。

「実は、当店取引先の財務情報が漏洩したらいいんだ」

「らしい、というの？」

「漏洩元が当行だという証拠がない。ただ、その取引先は当行の一行取引いっけうとりひきでね。他に取引銀行が無いもので、ウチからではないかと社長が疑ってきた」

「お心当たりはどうなんです」

「当店で出来るだけの調査はしてみたが、そういう事実はない」

「会社名は？」

タキザワ電気という、売上げ七十億円の中堅企業だと、神楽はいつた。主要取引先の一部上場メーカー、東京電気工学へ、同社の財務情報と融資に関する記録が一切合切、届けられたという。

「そんなことは過失ではありえまい？」

「おっしゃる通りです。稟議先ですか」

指宿はきいた。帝都銀行の融資先は支店長決裁で融資可能な「裁量先」と、本部の与信所管部決裁が必要な「稟議先」とに分かれる。

「所管は融資部だ」

稟議先の場合、本部は支店と同じ顧客データを共有しているはずだ。もし、支店で漏洩の事実が無いのであれば、あとは本部を疑うしかなくなる。

融資部か。

「なんでも、送りつけられた茶封筒の差出人は、ミカドとかいう匿名の名前だったそうだが」

神楽が意外なことをいった。

「ミカド……？」

「心当たりでもあるのか」

偶然のはずはない。そちらへ伺います、という指宿は受話器を置いた。

3

店用車のグロリアは大崎駅の手前で右折すると、住宅と工場、それに商店が混在する商工業地域に乗り入れた。工場の敷地を囲む灰色の壁、商用車が行き交う殺風景な道路を買い物らしい自転車の主婦が時折、あぶなかしげに車を避けていく。

財務情報が漏洩したというタキザワ電気の所在地は、大崎に隣接する西品川の一角だ。

「今回の事件で、主要取引先である東京電気工学との関係が悪化しているらしい。タキザワは有力な下請けのはずなんだが」

五反田支店副支店長神楽好久の言葉に、指宿修平はうなずいた。東京電気工学は、プリンターなどパソコン周辺機器で業界をリードしている一部上場のメーカーだ。

「もし、同社との取引が縮小、ないし打ち切られるような事態になれば、タキザワは倒産するかも知れん。なにしろ、半導体不況のあおりを受けて、そうとう痛んでゐるからな」

「ですが、東京電気工学は下請け企業の財務内容を定期的に提出させていたのではありません。それが何故、いまさらそんなことに？」

指宿は疑問を口にした。

「どうやら、タキザワ電気は、粉飾した財務内容を報告していたらしい」

俗に、企業は三種類の決算書を作るといわれる。税務署用、取引先用、そして銀行用だ。税務署には赤字の、取引先には収支トントンの、銀行には黒字の決算書を提出するというのである。

それにしても、銀行に提出した決算書の粉飾が見つかって問題になるケースはたまにあるが、取引先に向けて提出した決算書の粉飾がそれほど問題になるといえるのは、あまり聞いたことがない。

「背景には、東京電気工学の下請け政策の変更があるんだ」

半導体不況、それにさらに追い打ちを掛けるIT不況で、東京電気工学の業績が悪化。下請け企業との関係見直しが進められる中で、同社では昨年暮れ、主要下請け数十社で組織していた協力を解散した。その結果、従来の取引関係は考慮せず、コストが安く、しかも財務の安定している会社への重点発注が決定されたというのである。

「そこでタキザワ電気は、財務を大幅に改善したように見せかけた決算書を東京電気工学へ報告していたわけだ。それがこの一件で露見した」

車は、零細工場が密集した地域にさしかかっていた。所々破れたグリーン系のフェンスが左手に続いている。大手運送会社のトラックターミナルがあり、大型トラックが居並んで積み込み作業の最中だ。タバコに火を点けた神楽が窓をわずかに開けると、ほこりっぽい空気が流れ込んできた。

「営業本部から聞いた話だが、タキザワ電気に対して厳罰を科すべきだという意見が

東京電気工学の経営陣からも出ているようだ。同じような粉飾が蔓延まんえんして、無用のリスクが膨張するのを防ぎたいんだろう。タキザワの自業自得といたいところだが、財務の漏洩元が当行ではな」

フエンスが途切れると、小さな作業場兼事務所が並ぶ界限に出る。午後七時だが、明かりの灯っている会社は少ない。不景気の波にどつぷりと漬かったこの辺りでは、青息吐息の町工場が少品種小ロットの受注でかろうじて息を継いでいる。破産を知らせるビラを貼った社屋や、無人と化した途端に荒廃した工場跡地も時折、目についた。

タキザワ電気は、そんな零細企業が犇ひしめく地域で、いかにも中堅企業らしい比較的大きな自社ビルを構えていた。

「これはとんでもないことだ、副支店長」

応接室に通され、テーブルを挟んで向かい合うと、社長の滝沢俊太は染みの浮いた顔を紅潮させた。くつてかかる口調である。

「仰おつしやる通りです。調査を進めておりますが、今のところ当店から洩れた事実はありません。とりあえず、そのご報告に参上した次第です」

滝沢に納得した様子はない。むしろ、その目に滾る怒りが増していく様を、指宿は「なにかあるのか」という嫌な予感とともに見ていた。

「この件で東京電気工学へ呼ばれたよ。実は、さきほど行つてきたところだ」「いかがでしたか」

不安を隠しきれず、恐る恐る聞いた神楽を、滝沢はぐつと睨みつけた。

「来月からの取引は再考させてくれということだった。これはお宅のものだろうといつて返してくれたよ。皮肉たつぷりにね」

「取引再考、ですか……」

愕然とした神楽に、滝沢は手もとの茶封筒を投げて寄越す。勢いで、中に入っていた決算書が顔をのぞかせた。

「毎年、当社が作成する提出用決算書は五通だけだ、副支店長。税務署に一通、東京電気工学などの取引先に三通、そしてお宅の銀行に一通。こんなことは自慢にもならないが、正直申し上げて、相手によつて数字が多少違う。何がいいかわかるね」神楽の喉がごくりと上下する様を指宿は見ていた。

「す、すると、これは——」

銀行用の決算書。しかも、タキザワ電気は帝都銀行の一行取引だった。他に、この

数字の決算書が洩れる先はない。

指宿は、その茶封筒の差出人をみた。

フェルトペンで記された文字は、手書き。なかなかの達筆だ。

たった一文字。いかにも、という仄めかし――。

帝^{ミカド}。

蒼白になった神楽は、額をテーブルにこすりつけるようにして平謝りになる。

隣で同じく頭を垂れた指宿の胸に去来したのは、なぜタキザワ電気という会社の決算が狙われたのか、という疑問だった。帝は、何らかの形で、タキザワ電気と関係があるのか……。

決算書はコピーで、原本ではなかった。

「見せていただいてよろしいでしょうか」

一言断つて指宿は決算書を開けた。

まっさきに飛び込んできたのは、チェックの痕跡だった。おそらくは鉛筆で、勘定科目や数字の頭部に印がつけられている。原本につけられたものがそのままコピーで写し取られたものだ。

「これは……」

指宿の胸に、ある可能性が浮かび上がった。

「ひとつお伺いしたいのですが、東京電気工学さんの下請け政策の変更で御社が残った代わり、元協力会でありながら淘汰された会社もあつたということですか」

「ありますよ、もちろん」

滝沢はタバコを銜え、だから何だという顔をした。

タキザワ電気的主力業務は、半導体の「実装」だ。実装とは、プリント基板の上に、細かな電子部品を装備していく工程のことである。

半導体不況の中、生産が減少すれば実装を主力とする会社もまた苦しくなる。同業者同士での叩き合い、限定されたパイの奪い合い。今、この業界は不毛な過当競争の最中にある。

「つかぬことをお伺いしますが、そういう会社との関係は円満ですか」

「円満って、あんた……」

滝沢は歯切れが悪くなった。「下請け協力会も解散したし、もう仲良くやっていく時代じゃないんだよ。食うか食われるか。他社が取ればウチが倒れる。そんな過酷な競争にさらされているというのに、競争相手のことなんか考えていられるか？ 円満とかそういうのは、関係ない。現に東京電気工学自体、そう言つて憚はばからないんだか

ら

滝沢の言葉は、いまこの世の中で中小企業が置かれている立場を如実に代弁していた。

かつて互いに協力しあってきた会社同士が、生存を賭した激烈な競争を繰り広げる。仕事を確保するために、取引先から提出を求められた決算書を粉飾する。それが深刻な不況の実態なのだ。

4

融資部でタキザワ電気を担当しているのは、北村洋佑（よゆうすけ）という若手調査役だった。

渋谷、池袋、新橋という大店で融資を経験し、役付への昇格と同時に中小企業向け融資の中枢である融資部に配属になったエリート行員である。

「五反田以外の他店で信用照会したのが洩れたんじゃないですか。オンラインで財務内容の照会ぐらいいできますから」

タキザワ電気の情報漏洩の話をする、北村は迷惑そうな顔でいった。

「流出しているのは『生』資料のコピーで、コンピュータでアウトプットしたデータではないんだ」

指宿はいつた。

「だったらやっぱり犯人は五反田支店の行員でしょう」

北村は、そう決めつけてから、眉をひそめた。

「まさか、私のことを疑っているんじゃないでしょうね。冗談じゃないですよ」

デスクの脇には、クレジット・ファイルの山がある。

クレジット・ファイルとは、融資先一社毎に作成される情報ファイルのことだ。この中に、会社概要や稟議書などその会社に関するあらゆる情報が詰め込まれる。

デスクに載りきらないファイルは、脇におかれた台車に山積みになっていた。企業決済の重なる二十五日を間近に控えた繁忙日だ。融資の決裁に遅れは許されない。銀行の仕事には必ず期限があり、期限を過ぎた仕事は無に等しい。仮に月末に金が要るといえばその金は月末までに融資して初めて役に立ち、それに間に合わなかつたら何の意味もない。

帝都銀行の国内融資に関する審査部門のうち、最大の陣容を誇るのがこの融資部だった。

支店で長年融資を経験してきたベテラン揃いだが、それ故、ここは、帝都銀行本部の中で最も泥臭く殺伐として、その雰囲気は、さながら「工場」といつても良い。

この部署で働く者は、支店から送りつけられてくる稟議書に目を通し、様々なコメントや数字に赤と青の鉛筆でチェックを入れながら、「貸す」か「貸さないか」の判断を強いられている。連日、しかも早朝から終電近くまで続く終わりのない労働だ。過労で体を壊す者も珍しくはない。

融資部が管理するのは、各支店に割り当てられた裁量範囲を超えた会社である。

帝都のルールでは、会社の決算資料は、支店が取引先から申し受け、それをコピーしたものを融資部へ送付することになっていた。

タキザワ電気もまた、そうした一社であり、融資部には、五反田支店と同じ決算書のコピーが保管してあるはずだ。

「念のため、タキザワ電気のクレジット・ファイルを見せてくれないか」

聞こえよがしの溜息とともに立ち上がった北村は、指宿をフロア奥にある書架へ案内した。図書館によくあるような電動式の書架に、大量のファイルが収納されている。面倒くさそうにボタンをおして操作すると、北村は通路の真ん中辺りから、一冊のファイルを抜き出した。

「どうぞご自由に。もういいですか」

北村は軽く右手を挙げると、そそくさと自席に戻っていく。

指宿は近くのキャビネットの上で、綴とじられている決算書の中味を開いてみた。

赤と青の鉛筆で入れられた派手なチェックが目飛び込んでくる。漏洩していた問題の決算書を広げ、並べた。

同じものだ。

「漏洩していたのは、この決算書か」

書庫は融資部の最奥部にあり、外部の者が勝手に閲覧できるようにはなっていない。だが、融資部の人間であれば可能だ。部内者なら、だれでもこのファイルを手にすることはできるだろうし、そうしていても怪しまれることもない。

指宿はゆつくりと息を吐きながら、ぴりぴりした雰囲気でせわしない作業が進んでいる融資部のフロアを眺めた。だが、この中の一人は、確実に別なことを考えている。取引先の情報を外部に持ち出し、さらに、大量の顧客データを街の名簿業者に売り捌く。見た目も仕事ぶりもまったく変わらない一見普通の銀行員が、銀行の信用を徐々に蝕んでいるのだ。

「分からないのは、やはり動機ですわね」

鍋木和馬はミーティング・ルームのクリーム色の壁を見つめながら腕を組んだ。

「融資部の人間がなんらかの理由で当行を恨んでいるというのは、考えられないことではありませんが」

行員の中で、組織に不満を持つ者は決して少なくはない。指宿とて、銀行という組織を手放しで賞賛する気はない。

多様化する銀行業務に従い、銀行員と一口にいつても様々なスキルがあり、個性がある。だが、そのどれもが正當に評価されているわけではない。行員の不満の大半は人事についてである。

エリートを自認する銀行員がコースアウトした現実を突きつけられた途端、銀行への忠誠心を絶望と怨恨へ変える——そうした現実を指宿自身、目の当たりにしたのは一度や二度のことではない。

だが、〃銀行憎し〃での情報漏洩なら、なぜタキザワ電気という個別企業をねらい打ちにするのか。

「帝〃は本当に銀行員だろうか」

指宿は胸に涌いた疑問を口にした。

「しかし、調査役。融資部の人間でなければ、顧客データもタキザワ電気の情報も入手することは不可能じゃないですか」

「融資部から情報が漏洩しているのは間違いないと思う。だが、情報を漏洩させた犯人と、帝〃と名乗る男が同一だという証拠はない」

「外部の者との共犯だと——」

小部屋の話が鳴って鐘木の問いは中断した。

「調査役にです。新宿の広瀬さんから」

差し出された電話に出た指宿に、広瀬のうわづった声が飛び込んできた。

「相手から連絡があった。買うって返事しておいたけど。いいよね」

「結構です。日時の指定はありましたか」

「明後日」

と広瀬は応えた。「現金で欲しいらしい。答えは保留してある」

「了解してください。返事はどうやって？」

「しばらくしたら、向こうからかかってくる」

広瀬から再び電話があったのは、きっかり一時間後だった。

歌舞伎町にあるプリンスホテル地下のラウンジ——それが帝の指定した受渡場所だ。

「見てろ。とつつかまえてやる」

勢い込む鎗木の言葉を、指宿は釈然としない思いで聞いた。

「顧客データを漏洩させた犯人が融資部員だとすれば、我々が動いていることを当然、知っているはずだ。危険を承知で取引を申し込むだろうか」

指宿の言葉に、勢い込んだ鎗木も真顔に戻った。

「漏洩させた行員と帝とが同一人物とは限らないということですか」

鎗木は続ける。「顧客ファイルは故意ではなく、過失で漏洩した。帝は偶然データを入手しただけで、当行行員とは無関係と？」

違う。偶然が重なった話ではないはずだ、と指宿は思った。

「タキザワ電気の件も、偶然とは思えない。帝には何らかの意図があったはずだ」
新宿の広瀬に帝が指定した取引は、明後日。まだ時間がある。

「東京電気工学の下請け先で、タキザワ電気の競合がどんな会社だったのか、調べてみよう。その会社がいまどうなっているかも」

鏑木はうなずいた。

「東京電気工学なら、営業本部で取引があつたはずですよ」

6

煤すすけた産業道路の上空に、黄色のセロハン紙を透かして見ているような太陽が浮かんでいた。

道路を行き交う大型トラックの舞い上げる埃ほこりがいつまでも消えないで空中に堆積しつつある町。道路を一本海側へ渡るたびに不景気の度合いが増していくとも言われている町。やけに疲れ切つて何十年も働きづめの人生を想起させる光景には、町工場の建家たてやの低く平たい屋根が続いている。

指宿を乗せたシルバーのセドリックは、産業道路沿いにある羽田支店を出ると、一路大森方面へ北上し、運河の手前で東糀谷方面へ右折した。

昨夜、帝都銀行の営業本部を通じて東京電気工学へかけた電話は、経理部からさらにいくつかの部門を回され、ようやくPCB事業部というセクションにつながった。

「あれだけの大企業ともなれば、下請け企業の数も相当あるはずです。タキザワ電気の競合という手がかりだけで突き止められるものでしょうか」

そんな鏑木の心配は杞憂きゆうに終わった。下請けの数は多くても、半導体関連、しかもプリント基板への「実装」という分野になると国内の発注先は限られていたからだ。

タキザワ電気と実際に競合していた会社は二社しかなかった。しかし、その内の一社は、関西にある店頭公開企業で、業績も好調なことから私怨による漏洩云々という話の似合う先ではない。従って、指宿が注目したのは、残りの一社のほうだ。鏑谷電業——。羽田支店の融資先だ。

この日、指宿は、朝一番で羽田支店に連絡をとった。

「あの鏑谷電業がなにか」

そのとき電話に出た融資課長の進藤義隆は、怪訝そうに会社の名を口にした。

事前にオンライン端末で調べ上げた信用等级付けは「9」。業績がいい会社のはずはなかった。二十億円近い融資は延滞中だ。業績はかなり悪化しているに違いないと考えたが、進藤の返事は予想を超えた。

「実は、半年ほど前に第二回目の不渡りを出しまして」

電話で済ませる話ではないと判断した指宿は訪問の意思を告げた。

その進藤課長から、さきほど、羽田支店の応接室で詳しい経緯について説明を受けただけだ。

「主力取引先である東京電気工学さんの受注が減少したために、採算がとれなくなつてしまったんです。それが工場を新設したばかりだったものですから、業績を直撃しました」

「この不況下に工場新設ですか」

「いつとぎのIT景気で、先行きの需要を読み誤つたというところですね」

疑問を呈した指宿に、進藤は説明した。「思惑が外れて、秋以降ぱったりと注文が止まってしまったんです」

「ぱったりと」のところ、進藤は手刀をつくってテーブルに振りおろす。「中小企業は社長の勘だけが頼りですからねえ」と皮肉も出た。

糀谷電業は帝都銀行が主力。他に同じ都市銀行が数行、出入りしていたが、融資シェアは帝都が七十パーセントを占め、担保の余力もなかったことから、業績が悪化した途端に他行は一斉に「引いた」という。

「まあ、結果ウチも逃げたわけですから、よそさんのことは言えませんが」

「その際のやりとりに何か問題はありませんでしたか」

進藤は表情を曇らせた。

「いいえ、そのようなことは。ですが、貸し渋りだなんだと言われましてね」

「貸し渋り？」

「ちよつと見てください」

進藤はテーブルに置いたクレジット・ファイルを開いた。

「受注が減つてからというものの次第に資金繰りも苦し紛れになつてきましてね。最後

に申し込まれた融資はまさに命運がかかつていまして——」

車は、小さな町工場が軒を連ねる工業地域をゆつくりと徐行していた。

進藤がいつた稟議は、いま指宿が手にしているファイルに綴とじられていた。

希望融資額、三千万円。

三カ月の短期融資だが、担保欄には「信用」の二文字が入っていた。

「信用しろつて言う方が無理ですな」

進藤の言葉は、しかめた表情とともに指宿の胸に残っている。

後味の悪い話だ。

問題は帝都の対応について、相手がどう思ったかだと指宿は考えた。当行が法律的に正しくとも、人間として、同じ信義則に立つパートナーとして、お互いの信頼の延長線上で物事を考え、処理したか。そこに逸脱があつたとき、当行に対する恨みが生じるのである。

「二十年來の取引ですか」

隣に座っている根津寛治かんじにいった。糀谷電業の担当者である。

「ええ。従来はとても親密な関係にあつたんです。ほんとうはいい社長さんなんですよね」

たしかに、工場への過剰投資が無ければ、町工場で売上げ四十億円の数字は立派だ。突然の業績悪化だが、以前には数億円の利益を上げた時期もあつたことを、指宿はクレジット・ファイルの情報から見て取つた。

最後の稟議は、決定欄が空白になつていた。承認であれば「可」の文字が入るはずだ。事実上の稟議否認――。

帝都銀行の場合、制度上、「否認」という言葉はあつても、実際には話し合いの末、支店から自主的に「取り下げ」ることが通例となつていた。

「この融資を実行していたら、助かっただろうか」

指宿の問いに、根津の頬がぎゅつと引き締まった。

ひよろりとした長身の男で見かけは柔い印象だが、この男の手による三千万円の稟議はかなりの力作だった。ワープロで書かれた、レポート用紙十枚に及ぶ「所見」は、なんとか助けてやりたい、融資したいという担当者の悲鳴まじりの願いが聞こえてきそうだった。その熱意に、指宿は打たれた。

だがいま、根津は応えず、さあどうでしょうかと、と曖昧な返事を寄越す。本心ではなく、指宿に対する警戒心が言わせたのだろう。

俺が本部の人間だからか。

支店業務に携わっている行員にとって、本部という上座でのうのうとエリート面をしている人間など信用に値しないのだ。うっかり口を滑らせて本音を話せば、帰り際にも「彼はこんなことを言っていたぞ」と副支店長辺りに耳打ちしていく汚い奴等——そんなイメージは支店行員に根強い。

正直な感想の代わり、「つきましたよ」という根津の言葉が聞こえてきた。

薄汚れた鉄筋コンクリート造りの事務所の前で車は停止していた。隣接するのは、赤錆あかさびの浮いた、いまにも傾きそうな鉄鋼会社だ。鉄同士が擦れる甲高い音とともに、

ウインチを巻くモーターが唸りをあげる。鉄、焦げた油の臭い。空気を吸い込むと、目に見えない無数の微粒子が肺腑はいふくに流れ込んでくる気がした。日本の製造業を支え続けてきた工業地帯の真ん中に指宿は立っている。

糺谷電業は第二回の不渡り後、少数の従業員だけが残って会社を存続させているのだと根津はいつた。

「なんとか会社を再興させようと頑張ってるんです。社員も高齢で、再就職を考えるよりそのほうがつとり早いですから」

不渡りを出したのに信用格付けが最低レートの「10」に下がらないのは、現金商売でかろうじて会社を維持しているからだだった。

不渡りを出すということ、倒産するということは別なのである。

一階の自動ドアは閉まったままになっていたので、裏へ回った。

裏口から入ると、がらんとして電気の消えたフロアがあり、その向こうの事務所に人影が見える。

「よお。まだなにかとつてくつもりか」

根津の顔を見て立ち上がってきたのは、初老の、白髪が目立つ男だった。社長の木幡信三ぼたしんぞうである。

木幡は奥の社長室を指さし、それから指宿に目を止めると、初見と気づいてそれでも上着を手を取った。

「総務部特命担当？」

指宿の差し出した名刺を手にした木幡は口にした。「どんなお仕事なのかな」

「まあ、ありていに言えば、不祥事の調査です」

木幡は、「ほう」、といって、じつと指宿を凝視ぎょうしした。木幡の目はどこか青みがかかっていて春先の空のような色をしているのが特徴的だった。そこにいま夕立ち雲のような警戒心がせりだそうとしている。

「面白いじゃねえか」

木幡はいった。「うちで何か不祥事があつたと？」

「いえ。ある会社で、ちよつとした問題がありまして。御社の同業だったものですか、一度お話を伺つてみようと考えた次第です」

「うちの同業？」

木幡は慎重な口振りになった。

「タキザワ電気という会社なんです。ご存知ですか」

「知ってる」

木幡の声は、蠟人形が喋ったかのようにじつとりと重くなつた。

「もしよろしければ、業界での評判をお聞かせ願いたいのです」

木幡はしばらく考えた。やせた胸がゆつくりと上下している。

「評判か。比較的新しい会社だが、強引な営業でのし上がった——そんなところだろうよ」

皮肉を込めた調子で言った木幡のたるんだ頬に、赤い斑点が浮かんだのを指宿は見た。

「木幡さんもそうお思ひになりますか」

木幡は、応える前にぐつと押し黙つた。再び顔を上げたとき、赤い斑点はさらに増えて、顔全体に赤味が差していた。

「思うね。俺は、ああいう会社は絶対に許せない。それは、あんたら帝都銀行についても同じことだ」

ふいに話が帝都にまで及び、隣にいた根津が息を呑んだ。

「なにか不手際がありましたでしょうか」

「不手際だと？ あるに決まつてるじゃねえか」

木幡は吐き捨てた。

「あの工場だつてそうだ。土地があるから買えとしつこく迫つたのは、お宅の銀行だろうが。景気はどんどん上向くから大丈夫だのなんだのつてその気にさせておきながら、業績が悪くなつたら見殺しだ」

「当行から、土地をご紹介した？」

意外な言葉に、根津を振り返つた。根津は困惑した表情で、黙りこくる。

「この人は貧乏くじひいたただけだよ」

木幡はいった。「悪いのは他にいる。人をだまくらかして、自分はとつとと出世したとんでもねえ野郎がな」

木幡は立ち上がると、キャビネットから書類入れを持ってきて見せた。中には、羽田支店が送りつけたという不動産情報のファクシミリがぎつしりと詰まっていた。

指宿の目はその中味にはなく、厚紙でできた書類入れの蓋ふたに吸い寄せられる。

「帝都銀行関係」と記された「帝」の文字は、東京電気工学へ郵送された封筒の筆跡と同じものだったからだ。

この男が帝なのか――。

いま、木幡の顔に、怒りだけではなく、悪意が浮かんだ。いい社長さんなんです、という根津の言葉は、対峙たいじしている男の印象からあまりにかけ離れていた。

「融資見送りの理由は、なんだったんだ」

糺谷電業を出た指宿は、待っていた車の後部座席に乗り込んでから根津にきいた。「木幡社長が描いた業績回復のシナリオは信用できないということでした。それに、担保が不足しているから融資はできないと」

「社長はそれを貸し渋りだととらえたわけか」

「ええ。俺がそんなに信用できないか、と烈火の如くお怒りになりました。その前にもまづいことが……」

根津はついい口を滑らせたことに気づいて指宿の顔を見たが、あきらめたように、言葉が続けた。

「最初に融資の話が出たとき、貸す、と課長が約束してしまったらしいんです」

それか——。稟議の承認前に、融資を約束することを「融資予約」という。銀行員にとって絶対的な禁止事項のひとつである。

「稟議は難航した末、見送りになったのですが、結果が出たのが資金が必要な決済日当日の午後だったんです。手の打ちようがなくて……。当の課長は否定しています
が」

「本当のところどうなんだ」

指宿の言葉に、根津は思い詰めたように唇を噛んだ。

「木幡社長が嘘をついているとは思えません」

しかし、言った言わないの泥仕合から得るものは少ない。だから木幡は別な手段で報復を思い立ったのではないか。情報漏洩という報復を。

「私から聞いたことはご内密にお願いできませんか」

口の前で指を立てた根津に、心配するな、と指宿はいつた。

もう一度、糀谷電業のクレジット・ファイルに目を通してみた。そこには、親密だったという関係を立証する様々な記録が残っている。ページをめくった指宿は、ある稟議に目をとめた。

融資金額、五億円。

見込み違いで過剰投資となった設備資金だ。帝都銀行との取引関係の絶頂期。誰が、その後の転落を予想したのだろうか。

指宿はその稟議の捺印を見た。根津が書いたものではなかった。「藤枝」という印が捺してある。

「この人は？」

「私の前任者です。木幡社長に土地を買わせて融資したのは、藤枝さんです。実績が認められて、当店から融資部の審査担当へ栄転されたんです」

7

羽田支店に在籍当時まだ係員だった藤枝賢は、現在融資部第二グループの調査役に栄転していた。入行八年目。支店の融資課を三つの店で経験し、昇格と同時に調査役に任じられたのは、実績が高く評価されたからだ。

「糺谷電業と関係があるといっても、あの藤枝が情報を漏らしたとは、私にはどうも思えません」

「同期だったな」

筒木和馬は真剣な顔になった。

「入行時の導入研修で一緒でした。初任地は大塚支店だったと思いますが、その後羽田に転勤していたとは知りませんでした。生真面目な男という印象でしたが」

人事部から取り寄せた藤枝の資料を見ながら指宿修平はうなずいた。今まで藤枝の

上司となった者たちも大概、鎬木と同様の評価を下していた。

「人事への不満もなさそうだな」

この歳で融資部調査役。審査担当なら悪くないコースだ。

「奴にかぎって、情報を漏洩させる動機があるとは思えません」

だが、顧客データが融資部から漏洩しているのは間違いない事実だった。その融資部に所属している行員で、糍谷電業と繋がるのは藤枝しかいない。

「藤枝と最近、話したことは」

指宿に問われ、鎬木は、いいえ、と渋い顔でこたえた。

「行内ですれ違えば、声ぐらいはかけますが」

八年前の印象を語る鎬木の言葉には予断がある。新宿の広瀬が「帝」と名乗る犯人と接触するのは明日だ。信用等级付けを含む情報漏洩をそこで阻止できればいいが、約束通り取引が行われるという保証はどこにもなかった。

指宿は人事資料に貼付された繊細そうな男の顔写真を一瞥してから、内線番号を回した。

「はい、融資部です」

苛立つというより、殺気だっているといつてもいい声が出た。

「藤枝調査役？」

「おたくは？」

「総務部特命の指宿です」

名乗った途端すつと息を吸い込んだのがわかった。

「あなたが羽田支店当時、担当された糶谷電業さんのことで、お話を伺いたいのですが」

返事まで一瞬、間が挟まった。

「糶谷電業が何か」

そっけない返事の背後に、「工場」を思わせる殺伐とした融資部の喧嘩がかぶさっている。藤枝の声はどこか頼りなげで、不安にかられているような響きがあった。

繊細というより神経質な印象の男だった。銀行という職場は、往々にして人の性格をささくくれたものへと変える。藤枝もまたその例外ではなかった。

だが、逆にそんな男が、情報漏洩などという大それた罪を犯すかという、当然の疑問もまた涌いた。もし、この男が犯人なら、動機はなんだろうかと、指宿は思った。

「お忙しいところ、お呼び立てして申し訳ない」

指宿の言葉に、「いえ」と短く応えてソファにかけた藤枝は、眉間に皺しわを寄せ青ざめていた。

「糶谷電業が不渡りを出したことはご存知ですか」

「ええ。羽田の後任から電話で報告がありましたから」

「糶谷電業の木幡社長と最近お会いになったのは、いつですか？」

藤枝は戸惑いの表情を浮かべた。

「転勤で羽田を離店したのが去年の十月ですから、もう一年ぐらい前になりますか。会ったのはそれが最後です」

会ったのは？ その言い方が指宿にはひっかかった。

藤枝は、緊張した面持ちで、指宿の目を直接、覗き込んでくることはなかった。膝の上で、白くなるほど力をこめて指を組んでいる。

その様子は、少々苛ついている様にも見えた。

「質問の意図が見えないんですが。どういうことでしょうか」

「率直に申し上げますが、当行の顧客情報の漏洩に木幡社長が関与している可能性がある」

「それで？」

「行内の誰かが、木幡社長に顧客データを渡しているはずですよ」

単刀直入な指宿の言葉に藤枝は一瞬押し黙った。

「それで、私が疑われているということですか。糞谷電業の元担当という理由で？」

馬鹿馬鹿しい」

「あなたと木幡社長との関係はどうでした」

藤枝はうんざり顔を作る。

「融資担当者ですからある程度は親しくさせていただいていたよ。だけど、それだけです」

「五億円の設定資金は、あなたの売り込み案件だとか」

「その何が問題なんです」

藤枝は苛立ちを言葉に込める。

「その融資が結果的に、過剰投資になったことは問いません。しかし、木幡社長はあなたのことを心良く思っていないらしい」

「知りませんよ、そんなこと」

藤枝はムキになって吐き捨てた。

「不渡り前に木幡社長から電話があった——違いますか」

指宿はきいた。藤枝の羽田支店在籍時、糘谷電業の業績は良好だったはずだ。いま木幡が藤枝のことを悪くいうのは、隠されたその後の経緯に問題があるからではないか。

「確かに、電話がありました」藤枝は認めた。

「どんな用件だったんです」

「稟議を承認してくれと」

「あの三千万円の運転資金ですか」

「無理だといったんです。担当も違うし、私情で判断することじゃない」

「納得しましたか、社長は」

藤枝は首を横にふった。「いいえ」

妙だ。あの木幡がそういう態度をとるからには、それなりの理由があつてのことではないか。

「オブリゲーションを負つたりしていませんね」

藤枝は、頬にぐつと力を込めた。

「当然ですよ、そんなの」

視線は、ミーティング・ブースの壁を見つめたまま、指宿へ戻つては来なかった。

部屋を出る藤枝を見送りながら、なにかある、という指宿の思いはさらに強くなつていく。

藤枝がほんのわずかにみせた虚ろな表情、どこかに迷いを含んだ態度が、潔白を示すはずの言葉とは裏腹に、疑惑の芽を育んだ。

オブリゲーションを負う——という言葉をも、銀行ではよく使う。取引先から接待などを受けたために、融資を断らなければならぬ場面で断れなくなる。そんな借りを作ってしまう状況をいうのである。

藤枝は糀谷電業にオブリゲーションを負っているのではないか。

そう指宿は考えた。だとすれば、それはどんな内容だろうか。

藤枝は、この不況下で融資を伸ばせというノルマを、生来の生真面目さで果たそうとしただけかも知れない。だが、そのセールスにはいくつかの歪みがあった。

銀行の都合を優先させ、糀谷電業の実状を無視した強引さ、先行きの見誤りと、困

つたら助けるといふ安易な約束。売った側の藤枝に、逃げた者勝ちの発想があったとは思えないが、すぎる思いで電話をかけてきた木幡に、渋る藤枝の対応は「裏切り」に映ったはずだ。

それに加えて羽田支店での「融資予約」――。

ミスというより、銀行の傲慢と取引先軽視の体質が招いた問題だ。

藤枝が顧客データを漏洩したとすれば、逆にそうせざるを得ない事情があったのではないか。木幡に付け込まれるだけの事情である。

そう考えた指宿は、与信所管部から取り寄せた糞谷電業の資料を仔細に点検してみた。

その発見をしたのは、一時間も過ぎた頃だ。

「籾木、この会社の信用情報をとつてくれないか」

メモに、品川区内の会社名と住所を書いて渡した。

「なにかおわかりになりましたか、調査役」

「これを見てください」

指宿は糞谷電業の決算書明細を広げて見せた。

貸付金の項目だ。

「小山製作所という会社へ一千万円を貸したことになってますね」

明細には小山製作所の名前と、住所、そして売掛金額が記されている。情報端末で画面照会した籾木は、すぐに困惑した表情で戻ってきた。

「おかしいですね。該当する会社が見当たらないんです。余程小さな会社でも捕捉できるはずなんですが。どういうことでしょう、調査役」

指宿は、藤枝の人事資料を糶谷電業の明細書と並べた。

「小山製作所と住所が同じだ」

「これはいったい——？」

指宿はこめかみに指をあてた。

「私の推測だが、小山製作所などという会社、最初からなかったんじゃないか。これは銀行用に作成された虚偽の決算書だ」

中小企業は三種類の決算書を作成する——その言葉を思い出しながら指宿はいった。

人事資料に記載された藤枝の住所。それが代々木の社員寮から小山のマンションに移った時期と、決算書に貸付金が登場した時期とが一致していた。

「藤枝の自宅購入資金を木幡が融資したとは考えられないか。あるいは、五億円の設定

備資金の一部が回ったかも知れない。藤枝も当時、木幡の会社が倒産にまで追い込まれるとは考えてもみなかったんだろう。だが、東京電氣工学の方針変更で会社が置かれた環境は激変した。親密だった帝都銀行との関係も悪化し、木幡は当行に恨みを持つに至った。そこで、競合していたタキザワ電氣と当行へ報復するために、藤枝を利用しようと考えた」

木幡は藤枝の態度が許せなかった。憎んだ。その木幡が選択したのは裁判による不毛な闘争ではなく、憎い相手を自分の思い通りに動かして銀行に復讐する現実策だったのではないか。

「オブリゲーションを負った藤枝は木幡の言葉を拒むことができなかった。木幡からの借り入れが明るみに出れば藤枝の銀行員生命は終わる」

「しかし調査役。もし、藤枝がからんでいるのなら、『帝』——いや、木幡は名簿業者の広瀬が我々に接触したことを知っているはず。あえて取引に応ずる理由がわかりません」

箇木の疑問はもつともだったが、それは間もなく総務部にかかってきた一本の電話で解決した。電話の相手は、帝国インフォス。帝都銀行も取引のある、大手信用会社である。

「実は帝都さん関係の顧客信用情報があれば買うかという打診があつたものですか
ら」

帝か。身構えた指宿に、相手はいつた。

「新宿のヒロセ・サービスという零細業者ですが、質の悪い噂のあるところでした」

「ヒロセが？ 当行の情報を持っていると言つたんですか」

勢い込んだ指宿に、「近日中に入荷する予定だということでしたが……」

「広瀬は、本当に名簿をかうつもりだ」

受話器を置いた指宿はいつた。

「すると、明日の取引は——」

「それは我々を欺くためのダミーだ。本当の取引は別にある」

鎗木の顔色が変わった。

「でも、それをどうやって——」

藤枝。奴にきくしかない。

「私に行かせてもらえませんか。自分で確かめたいんです」

鎗木の言葉に指宿はうなずいた。

宵闇の迫る新宿歌舞伎町の一角に、そのホテルはあつた。

地下一階のラウンジは八分ほどの客で埋まっている。

ホテルの宿泊客と思しき者は少なく、ビジネスマンやひと目で水商売関係とわかる男女が多かつた。

指宿は一番奥の壁際の席で新聞を広げたまま、新たにラウンジへ入ってくる客へと視線を注いでいる。

腕時計に目を落とした。八時五十五分。すでにこの客の中に広瀬がいるかも知れないが、見分けることができなかつた。顔を知らないからだ。

視線を上げる。ラウンジの反対側にいる籾木が持つていた週刊誌を小さく振って合図を送って寄越す。再び、待った。

のろのろと時間が過ぎさり、五分が経過した。

ラウンジは客の出入りが激しくなっている。近くの丸テーブルから三人の客が立つ

たかと思うと、別のグループが入れ替わりに入ってくる。午後九時は待ち合わせの時間帯なのか、テーブルのほとんどが埋まりかけていた。

そのとき――。

見覚えのある姿が入口に立った。辺りを見回すとロビーを横切り、片隅のテーブルへ向かう。

木幡社長だ。

そのテーブルには柄物のシャツをきた五十ぐらいの男が座っていた。こすつからい表情をして、しきりと辺りに視線を配っている。

木幡がテーブルに近づき言葉を交わしたとき、指宿は読んでいた新聞を折り畳んだ。ゆつくりと二人のほうへ近づいていく。

「木幡社長」

声を掛けると、椅子を引きかけた木幡の動きが止まった。

「お、俺は関係ないから」

そそくさと立ち上がろうとした広瀬を、お待ち下さい、と鐺木が制止した。

「あの藤枝が……しゃべったのか」

木幡は信じがたいという顔になった。

「藤枝は銀行員としての一線を越えました。ですが、銀行に勤める者として、良心の全てを捨てたわけではありませんでした。過ちは誰にでもあります。たとえそれが取り返しのつかないものであっても」

木幡は小さく肩を揺すって笑いを吐き出す。指宿は続けた。

「社長に会ったら伝えて欲しいと頼まれたことがあります。——本当に申し訳ありません——そう謝って欲しいということでした」

木幡はあつげにとられた。やがて、ふっと吐息を洩らす。

「あいつも銀行員じゃなかったら、もつと別な人生があつただろうにな」

指宿は自分の中で何かがきしむ音を聞いた。感情がねじれ、悲鳴を上げる。そして、また一つ、何かが失われていく。ぽっかりと開いた心のスペースに銀行という職場が埋め合わせるものは、果たして何だろうか。